

小山実稚恵 ピアノリサイタル

1部

ノクターン 第1番 変ロ短調 Op.9-1 ショパン
第2番 変ホ長調 Op.9-2

ポロネーズ 第5番 嬰ヘ短調 Op.44 ショパン
第7番 変イ長調「幻想ポロネーズ」 Op.61

アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ Op.22 ショパン

2部

組曲「展覧会の絵」 ムソルグスキー

春

四季²⁰⁰⁹コンサート

2009年4月18日(土)6:45PM

会場:浜松市教育文化会館

主催:浜松音楽友の会

プロフィール

1982年チャイコフスキー・コンクール第3位、1985年ショパン・コンクール第4位と、二大国際コンクールに日本人として初めて入賞。人気・実力ともに日本を代表するピアニストとして目覚ましい活躍を続けている。2006年からはBunkamuraオーチャードホールにて春・秋年2回ずつ2017年までの壮大なプロジェクト“12年間・24回リサイタルシリーズ”「小山実稚恵の世界」を開始。集大成とも言うべきこのシリーズは、全24回のプログラムを既に発表し注目を集めるなか、大阪、札幌、仙台、福岡、名古屋でも進行中である。コンチエルトのレパートリーは60曲にも及び、国内外のオーケストラや指揮者と多数共演。シリーズ企画や室内楽にも積極的に取り組む他、「ラ・ロック・ダンテロン国際ピアノフェスティヴァル」(2006.07年フランス)や「ショパンと彼のヨーロッパ国際音楽祭」(2008年ポーランド)など海外においても、演奏・企画の両面で高い評価を得ている。ソニーよりCDを多数リリース。レコード芸術誌特選盤に選ばれるなど、いずれも好評を博している。2009年にはポーランドの名門シンフォニア・ヴァルソヴィアとの「ショパンピアノ協奏曲第1番、第2番(仮題)」をリリース予定。2005年度文化庁芸術祭音楽部門の大賞、2005年第7回ホテルオークラ音楽賞を受賞。東京藝術大学、同大学院修了。吉田見知子、田村宏両氏に師事。

小山実稚恵
ピアノリサイタル



MICHIE KOYAMA
PIANO RECITAL

写真: Katsuo Sakayan

●ショパン(1810~1849)／ノクターン 第1番 変ロ短調 Op.9-1
第2番 変ホ長調 Op.9-2

ノクターン(夜想曲)は、アイルランドの作曲家ジョン・フィールド(1782~1837)によって創始されたサロン風の潇洒な形式で、比較的穏やかなテンポと夢見るような旋律を持ったピアノ作品である。ショパンは、この分野に独自の方向性を織り込み、優美な旋律を叙情的に変化させながら芸術的な境地にまで高めた。20歳の時、故郷ポーランドを離れて、かつて公開演奏会で大成功を収めたウィーンに着いたショパンは、時を同じくして起ったワルシャワ蜂起のため、ウィーンの空気は反ポーランドに傾倒、十分な演奏機会が得られなかったため翌年パリに向かう。「Op.9」の3曲のノクターンは、この頃に作曲されている。「変ロ短調」はラルゲット、6/4拍子、三部形式。ノクターン中もっとも知られる「変ホ長調」は、ロンド風形式、アンダンテ、12/8拍子。

●ショパン／ポロネーズ 第5番 嬰ヘ短調 Op.44
第7番 変イ長調「幻想ポロネーズ」Op.61
／アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ Op.22

ポロネーズは、マズルカと並ぶポーランドの民族舞曲である。17世紀頃には農村での収穫祭や婚礼などで頻りに踊られ、また男女の出会いの場としての役割も果たした。男女がペアになって優雅に歩く踊りで3拍子、シンコペーションや2拍目に来るアクセントに特徴がある。やがてヨーロッパの宮廷で流行し、その名は世界的に広まった。そのポロネーズ様式をショパンは生涯好み、折に触れて書き綴った。生まれて初めての作品も7歳のときの「ポロネーズ ト短調」であり、父が採譜して出版された。そしてショパンは、一地方舞曲に過ぎなかったポロネーズを、著しく表象的で深い憂鬱を満ちた傑作に仕立て上げたのである。

「第5番」は1841年に書かれた。ジョルジュ・サンドと出かけたマヨルカ島から戻り、サンドの居宅のあるノアンで過ごしていた頃の作品である。四部形式を採って曲中のトリオにマズルカを用い、多彩な情感を封じ込めるなど極めて斬新な手法を採っている。

「幻想ポロネーズ」はショパン晩年の1845年から翌年にかけて完成した。ショパンはこの作品において、厳格なポロネーズ形式を凌駕し、既述のとも言えるほど純美極まりない性格を与えた。ショパン自身「書かれたる苦悩」としているが、それまでの作曲様式を打破したある種達観とええ取り取ることができる。曲は4つの重要な主題によって構成され、ショパン作品の中でも最高傑作のひとつと呼ばれている。

「アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ」が完成したのは、1831年7月のウィーン。「ピアノ協奏曲第1番」、「同第2番」を含むピアノと管弦楽のための作品をショパンは6曲創作しているが、その中で最後となったこの作品は、オーケストラのウェイトが一番軽く、現在では管弦楽部分を除いて独奏作品としてもよく演奏されている。優美なアンダンテのたおやかな情感が濃密で、技巧的な装飾の華麗さ、響きの構築など堂々たる展開を見せている。

●ムソルグスキー(1839~1881)／組曲「展覧会の絵」

ムソルグスキーは、バラキレフ、キュイ、ボロディン、リムスキー＝コルサコフとともにロシア国民楽派《五人組》のひとりである。生涯官吏としての生活を送る一方で、大胆な獨創性を持ち、民族的色合いの濃い新鮮な作品を次々に発表してフランス印象派に大きな影響を与えるなど、精力的に作曲活動を展開した。この作品は、1873年に夭逝した急進的建築家ヴィクトル・ガルトマン(1842~1873)の遺作展の印象を綴ったものとされている。その会場には設計図やスケッチ、デザイン等が400点以上も展示され、それらに誘発されてムソルグスキーは「夢中で作曲をした」と当時の手紙に残した。「絵」をモチーフにした10曲の小品と、それらを繋ぐ「プロムナード」から構成されているが、ムソルグスキーにとって代表的な器楽曲であり、19世紀ロシアが生んだ最も独創的なピアノ作品といえる。多くの作曲家が管弦楽編曲を試みたが、今日ではラヴェルによるものが一般的である。

「プロムナード」(5/4拍子と6/4拍子が交錯する雄大な主題が印象的)

1曲:「こびと」(こびとの歩く姿や陰鬱な雰囲気)〜「プロムナード」

2曲:「古城」(古い城の前で吟遊詩人が歌う)〜「プロムナード」

3曲:「テュイルリー」(公園での子供たちの喧騒)

4曲:「ビドゥオ」(牛の群れ)〜「プロムナード」

5曲:「燈をつけた雄鳥のバレエ」(極めて描写的)

6曲:「サムエル・ゴールドベルグとシュムイレ」(2人のユダヤ人の会話)〜「プロムナード」

7曲:「リモージュの市場」(人々の賑わい)

8曲:「カタコンブ」(古代ローマ時代の墓。「ローマ時代の墓」と「死者たちと死者の言葉による」の2つの部分からなる)

9曲:「バーバ・ヤーガの小屋」(原案は時計のデザインで、グロテスクな蛇の足の上に伝説の妖婆の小屋が建っている)

10曲:「キエフの大門」(全編を貫く主題がコーラルを採りながら発展し、壮大なコーダで幕を閉じる)